

教育的価値	具体的項目	教育課程
1【いきる】 2【かかわる】 3【そなえる】	①【かけがえない生命】 全ての生命は、かけがえないものであることを実感し、大切にす。 ⑩【ボランティア】 他の人や地域社会に役立つことを自分から進んで実践し、他人の喜びを自分の喜びとして共感する。 ⑮【東日本大震災津波の様子と被害の状況】 平成23年3月11日に発生した、東日本大震災津波の様子と被害の状況について理解する。 ⑲【災害時における情報の収集・活用・伝達】 震災津波の被害による教訓をもとに、情報の大切さ、情報の収集、選択・判断、発信の方法などについて理解し、活用できるようにする。	総合的な学習の時間

【題材】復興教育講演会、被災地訪問、紫波町の大雨・洪水被害状況ならびに防災対策調査 等

【対象】第3学年57名（全校生徒154名）

【実践の概要・詳細】

総合学習テーマ「生きる ～震災から学ぶ～」

- 1 **被災地勤務経験のある教諭からの講話**（9月27日）
震災当時、大槌中学校に勤務していた本校教諭の体験談等を聴く
- 2 **復興教育講演会**（9月30日 [全校生徒]）
元陸前高田市立米崎中学校校長 阿部重人先生を招き、陸前高田の震災当時のようすや現在までの復興状況についての話を聴く
- 3 **被災地訪問**（10月8日）
 - ① 大槌町被災地の見学と防災教育
語り部（おらが大槌夢広場）の方に町内（旧大槌町役場・江岸寺・赤浜 [蓬莱島遠景]）のガイドを依頼し、被災前の大槌町内の写真と見比べながら、震災当時の状況や被災地の現状について説明を受ける
 - ② ボランティア活動
大槌町沢山（辺地ヶ沢）にある畑「いきいき農園」で草刈りや開墾、植樹、石運びなどの活動を行う
 - ③ 大槌中学校との交流
大震災の年から交流している大槌中学校に代表生徒が出向き、廃品回収や募金活動で集めた支援金を贈呈する
- 4 **新聞報道から考える**
大震災に関連する内容の新聞記事を切り取り、記事からわかることや感想をまとめる
- 5 **平成25年8月9日における紫波町大雨・洪水被害状況調査**
8月に紫波町をはじめとした県内各地に被害を及ぼした大雨による洪水被害の状況について、紫波町役場土木課によるデータをもとに調査する
- 6 **紫波町の防災対策調査**
紫波町の自然災害への対策について、紫波町役場土木課職員や紫波消防署署員、本校副校長から話を聞く
- 7 **発表会（報告会）**（10月27日 [文化祭]）
これまでの学習内容についての報告と、「自然災害からどう身を守るか」というテーマでパネルディスカッションを行う

【2 復興教育講演会 のようす】



【3 被災地訪問 のようす】

①大槌町被災地の見学と防災教育



②ボランティア活動



③大槌中学校との交流



【授業の展開（被災地訪問のタイムスケジュール）】

時間	活動内容	時間	活動内容
7:10	二中集合		【学年長】活動場所→ボラセン(報告書)
7:30	二中発		※活動終了後、報告書をボランティアセンターに出す。
10:00	大槌着(旧大槌町役場前) 被災地見学と説明(ボランティアガイド)	13:00	いきいき農園(畑の開墾+草取り)
10:20	見学スタート	14:00	大槌中へ
11:40	終了 昼食 「おらが大槌復興食堂」	15:00	ボランティア終了
12:40	移動 ボランティア会場へ ローソン→ボランティア会場へ	15:30	大槌発
		18:00	帰校
		18:10	下校バス

<生徒の感想>

・今回の講演会を聞いて、まず復興が全然進んでいないということに驚きました。ニュースを見ても復興が進んでいるなどと言っていたので、私も安心して頭から震災のことが忘れかけていました。しかし、実際は復興はほとんど進んでいなく、仮設住宅の人などの大変な状況を知り、ショックを受けました。(中略)阿部先生が言っていたように私たちは「生かされている」ということを忘れず、**当たり前のように感謝して生活していきたい**です。また東日本大震災のことを決して忘れず、今の状況を色々な人に伝えていきたいです。(3年女子・復興教育講演会)

・僕は実際に被災地には行ったことがなく、いつもニュースなどで被災地の様子を見ていただけだった。初めて被災地に行ってみて、全く復興が進んでいないと思った。たくさんの機械などの音がした。バスから降りる前にガイドさんが、「気持ちをつくってからバスを降りて。」「大槌の人たちはあなた達を見ている」などと言われた。(中略)お年寄りを助けようとして亡くなった若い人や、お年寄りを助けようとしたが、津波が来てお年寄りを手放して生き残った人もいるらしい。どちらが間違っているわけではないとガイドさんが言っていた。自分がその場にいたら、どうしていただろうと考えた。次に旧役場に行った。旧役場は窓ガラスなどがない状態で残っていた。そこでガイドさんが言ったことは、家族にいつも感謝の言葉を伝えることだった。僕もいつ死ぬかわからないので、**いつも感謝の気持ちを忘れずに生きていたい**と思った。もし、自分が住人としている所に自然災害が起きたらどうすれば良いかと考えることができた。(3年男子・被災地訪問)

<まとめ>

本校では、今年度の復興教育を構築する視点として、

- ①「**ひとつづくり**(郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成する)」
- ②「**体験から学ぶ**(今回の震災津波と向き合い、この体験そのものを『教材』とし、生徒の『生きる力』を育む)」
- ③「**組織的・有機的指導**(震災津波に際した一連の対応を、学校の教育活動として有機的に関連付けて指導する)」

の3点に沿った計画を立て、実践を行ってきた。特に、①の視点に基づいた実践として行った、上記の7におけるパネルディスカッションは、パネリストの3年生がそれぞれの立場(「個人の防災意識を高く持つ」「県や町の防災事業を充実させる」「地域住民のつながりを深め、お互いに助け合う」)に立脚した意見を述べたことに対して、全校生徒から多くの意見が出された。**被災地の復興や紫波町の防災について、生徒一人一人が自分たちの問題として捉える契機にできたと感じられるものであった。**

また、今年度で3年目となる大槌町への訪問は、同じ県内でありながらも、その被災地から遠く離れた内陸で生活を送る本校の生徒たちが、被災地の現状を肌で感じる大きな機会となってきたが、今年度の3年生も、「復興はまだまだ遠い」という被災地の厳しい現状や、震災津波の恐ろしさ、命の大切さを実感する、かけがえのない体験となった。



来年度以降の復興教育も、これまで行ってきたような体験活動等を踏まえながら、上記の3視点に沿った教育活動を展開していきたいと考える。そこで、**本校の生徒たちに、被災地の復興や紫波町の防災等について、より深く考えさせるような教育活動**にできるような題材を、担当者を中心に吟味・検討していきたい。特に、生徒が被災地訪問に対して、より目的意識を持って臨むことができるように、その前段階の活動をより充実させる手立てを考えていきたい。

上記の実践4における新聞記事の感想記入は、3年生の各学級で3～4時間にわたって行ってきた学習活動であったが、被災地の現状等については、ほぼ毎日、何らかの形でマスメディア等で報道されてきているながらも、生徒たちの多くは、その報道に対して、家庭や学校生活において、日常的に深く受け止め、考える時間を取ってきていないと思われる。私たち教職員も含め、内陸に住む人間は、なかなか被災地の現状を実感する機会がなく、それゆえに、その現状に対する関心が日々薄れていく感があるが、だからこそ、被災地のことや震災のことに想いを馳せ、自分たちにできることを考え、主体的に行動していけるような生徒を育てる教育の在り方、手立てを考えていかなければならない。その取りかかりとして、新聞等の報道について生徒たちに考えさせる機会を日常的に持つように工夫していく（例えば朝の活動[朝読書・朝学習]の一環として）ことも一つの手立てと考える。復興教育に関連する学習活動が、一過性のものでなく、継続性のあるもののできるような工夫が必要と考える。